エジプト日本学校（EJS）における学級会の特徴（3）
―事後インタビューからみる教師と児童の認識の違い―

○石井雄大[1]　山田真紀[2]　清水克博[3]　林尚示[4]　安部恭子[5]

（坂戸市立坂戸小学校）[1]（椙山女学園大学）[2]（名古屋学芸大学）[3]（東京学芸大学）[4]（帝京大学）[5]

１．問題と目的

本研究は,「非認知能力の育成に向けた特別活動の国際化と質保証に関する研究～日本型教育先進地エジプトにおける Tokkatsu の効果検証～」の一環として行ったものである。エジプトの小学校で導入・実施されている特別活動（Tokkatsu）の現地化の実態を調査し,個人と社会のウェルビーイングを支える要素ともいわれる非認知能力に与える影響を明らかにする。本発表では,インタビューの発言内容から,エジプトの教師と子供たちが学級会の実践を通じて得たことを分析する。認識の違いや共通点を探ることで,非認知能力との関連を考察する。

２．調査及び分析方法

学級会の実践を行ったエジプトの教師 2 名（教員歴:5 年目と 14 年目）と子供たち 6 名（10 歳:2 名,11 歳:1 名,12 歳:1 名,14 歳:2 名）に事後インタビューを実施し,発言内容をカテゴリー分析の対象とした。カテゴリーの分類,設定の際には,M-GTA(木下 2007)の手法を参考にしながら,1 概念化(文の意味のまとまりで分類),2 カテゴリーの統合(概念を整理),3 確認,4 修正,5 再確認,という手順で行った。

３．結果と考察

（1）教師と子供たち（共通点）

集団における役割意識の向上や,集団で協力することのよさ,人生につながる力（ライフスキル）の向上に関するものが見られた。

（2）教師

学力の向上を実感している。また,教科横断的な学びに繋がっていることを実感している。間接的に学級会の取り組みが学力向上に影響していると考えている。分析力や,問題解決力など,非認知能力の向上を実感している。しかし,学級会の進め方に戸惑いを見せている。また,子供たちが何を得たのかを分かっていない部分もある。保護者や特活専門教師との連携に悩んでいる様子もうかがえた。

（3）子供たち

活動を通じて,クラスをより良いものにしようとする意識が芽生えている。話し合ったことを実行しようとする責任感を持てている。また,生活への問題意識の向上がみられる。協力するよさをとても感じており,他者への意見を聴きながら活動することで,共感性を育んでいることがうかがえる。

表１　子供たちの発言内容

カテゴリー	サブカテゴリー	定義
自己	役割意識	幸せ、緊張、私は素晴らしいことができている。素晴らしい役割をできている。
	活動意欲	やっぱりクラスや学校がすべて、好きなので一生懸命に取り掛かる。
	取り組み	例えばコミュニティーガーデンというもの 水をもったいないにしないために瓶の下に穴を開けて水を少しずつ使えるように。
	提案	学級会では自分のクラスを飾る、飾りましょうというテーマを提案したいです。
他者	学び	Tokkatsuの時、やっぱりみんな自分の意見を自由に言ったり聞いたりすることができる。なんて素晴らしいなと思っています。
	教師の在り方	ちょっと介入してほしいです。司会者はわかったこと、話すときとか不明なことを言うとき介入してほしい。
	共感性	例えばね自分が持ってるものが他人が持たない、持てない場合は彼は悲しいことと自分で感じてて、あげたいって気持ち。
	所属感	素晴らしいクラスを証明するため。
	協力	あの、みんな協力し合ってるので、うれしく感じています。
その他		２０１２年　その通り　など